

## 水土里の語り部交流会in京都を開催

整備部設計課

11月18日(日)、京都府亀岡市の亀岡市役所市民ホールにおいて、語り部・かたりすと・キャスターの平野啓子さんと、京都府亀岡市在住の「語り部」5名を招き、「水土里の語り部交流会in京都」(主催：近畿農政局、京都府、亀岡市、水土里ネット京都)を開催し、一般市民など約100名が参加した。

本交流会は、平成15年度より、農山村の伝統・文化・地域農業にまつわる話などをテーマに、地域に語り継がれている貴重な話を掘り起こし、都市と農村の交流や子どもたちへの伝承することが目的で、全国各地で開催され、今回が18回目の開催となり、今年は大分県、青森県での開催に続き3回目となる。

また、今回の交流会では、農業用水が流れる路をたどりながら、語りの舞台となる施設等を見学する「水の路めぐり」も交流会に併せて開催し、一般市民など約50名が参加し、「上桂川統合堰」や「大納言小豆畑」などを見学した。

交流会では冒頭、主催者から開会の挨拶があり、引き続き語り部からからは、地域にまつわる民話「大井川の鯉」、「走田の神様」が披露され、参加者はその語りに引き込まれるように聴いていた。また農業関係の語りとして、地域の特産品である「大納言小豆」栽培の苦労話や、室町時代に築かれた寅天堰の歴史や水争いにまつわる「寅天堰の役割と歴史」が、さらに、保津川開削成功の偉業を描いた大型紙芝居による「角倉了以翁ものがたり」が披露され、参加者の興味を引いていた。

意見交換会では、平野氏をコーディネーターに、農村振興局齋藤企画部長も交え、それぞれが持つ水土里への思い、民話を伝承していくことの大切さや苦労話など活発な意見が出された。語り部からは、広く全国へ伝えていくことも重要であるが、まず住んでいる地域の人に伝承していくことが大切ではないか。そのための手法として「語り」というのは非常に有効ではないかとの意見が出された。また、齋藤部長からは、地域の歴史や文化、農業などを語ることによって農村振興を図るため、みなさん一人一人が語り部になりましょうとの意見が出された。

会場は時折笑い声や感嘆の声が上がるなど、終始和やかな雰囲気にもまれ、約2時間半の交流会は、近畿農政局の川田整備部長から、この交流会が、住んでいる地域の歴史や文化、魅力を知る機会となってほしいとの言葉で締めくくった。なお、参加者へのアンケートでは、「語り」という手法は古くて新しく、親しみのある伝達手法であるといった意見や、地域に根ざした伝承を聞け、更に詳しい話が聞きたくなったといった意見が出されており、農山村の活性化に向け今後も語り部の交流に取り組んでいきたい。

[ 交流会の写真 ]



「大納言小豆」について語る河原多久雄氏



民話「大井川と鯉」について語る山本勇氏



亀岡子どもの本研究会による大型紙芝居  
「保津川の夜明け 角倉了以翁ものがたり」



「寅天堰の役割と歴史」について語る黒川孝宏氏



創作民話「走田の神様」について語る  
川邊久留実氏



意見交換会の様子  
(左から平野氏、河原氏、山本氏、栗山氏、  
黒川氏、川邊氏、齋藤企画部長)